

2019年3月20日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 苦悩のない日々を求めて

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄著『阿含經典2』（ちくま学芸文庫）／実践の方法（道）に関する經典群／諦相應／5如来所説（部分）

#### (2) 主題

釈迦牟尼世尊は、苦悩からの完全な脱却を求めて、四つの聖諦をそれぞれ三つのステップで探究したことが、経文に記されています。その跡をたどってみたいと思います。

### 2. 三つのステップ

#### (1) 三転十二行

今回学ばせていただく経文に、「三転十二行」という言葉があります。

これについて、中村 元著『仏教語大辞典 縮刷版』（東京書籍株式会社）には、次のようにあります。

「四つの尊い真理に関して、それぞれ三つの段階（示・勸・証）、十二のかたによって、合計十二度に考察すること。釈尊が鹿野苑において四つの真理（苦・集・滅・道の四諦）を説くのに、三つの段階（三転）によったことをいう。

(1)示転。これこそは苦である、これこそは集である、これこそは滅である、これこそは道である、と四諦をそれぞれ示すこと。

(2)勸転。苦は知るべきものである、集は断すべきものである、滅は証すべきものである、道は集すべきものである、と四諦の修行を勧めること。

(3)証転。苦を自ら知り、集を自ら断じ、滅を自ら証し、道を自ら修した、と、釈尊自らが自己について証すること。

（以下略します）」

これは、私たちが「四諦」を学び、修行する上で、まことに適切な指針であると思います。

#### (2) 洞察・探求・証明

しかしながら、この経文が語る所と、「示転・勸転」の意味が、そぐわないと思えてしかたがありません。

私は、この経文は、釈迦牟尼世尊が、四つの真理を洞察し、探求し、証明した経緯を語ったものであると受け止めて、三つの段階を、「洞察・探求・証明」と表現することにしました。

### 3. 苦の聖諦の探究

#### (1) 経文「如来所説」

##### ① 経文「如来所説」／苦の聖諦を洞察する

「かくて、比丘たちよ、苦の聖諦とはこれであると、さきにはいまだ聞かなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 284)

##### ② 経文「如来所説」／苦の聖諦を探求する

「比丘たちよ、また、まさにこの苦の聖諦を知るべきであると、さきにはいまだ聞かなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」(同書、p.284~285)

##### ③ 経文「如来所説」／苦の聖諦を証明する

「また、比丘たちよ、すでにこの苦の聖諦は、わたしによって証せられたのであると、さきにはいまだ聞かなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」(同書、p. 285)

#### (2) 苦の聖諦に関する三つのステップ

釈迦牟尼世尊は、人間の苦に関する普遍的な真理を直観的に洞察しました。

釈迦牟尼世尊は、人間の苦に関する普遍的な真理を、丹念に探求しました。

釈迦牟尼世尊は、人間の苦に関する普遍的な真理を、洞察・探求を経て証明しました。

それは、釈迦牟尼世尊が、いままで誰からも聞いたことのないことでした。

#### (3) 経文「如来所説」／苦の聖諦

「比丘たちよ、苦の聖諦とはこれである。いわく、生は苦である。老は苦である。病は苦である。死は苦である。嘆き・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは苦である。怨憎するものに会うは苦である。愛するものと別離するは苦である。求めて得ざるは苦である。総じて言えば、この人間の存在を構成するものはすべて苦である」(同書、p. 284)

#### (4) 苦の聖諦

釈迦牟尼世尊は、さまざまな苦を上げ、最後に「総じて言えば、この人間の存在を構成するものはすべて苦である」と締めくくりました。これは、人間は、自分の心身に起きるさまざまなことを苦悩しているということです。

これが「苦の聖諦」であり、釈迦牟尼世尊が、いままで誰からも聞いたことのないことでした。

#### (5) 人間は自分の苦を知らない

人びとは、自分は、自分の心身に起こるさまざまなことを苦悩しているのだとは、気がつかないのです。現代の人びとの多くも、自分の苦を見誤っていると思われま

### 3. 苦の生起の聖諦

#### (1) 経文「如来所説」

##### ① 経文「如来所説」／苦の生起の聖諦を洞察する

「かくて、比丘たちよ、苦の生起の聖諦はこれであると、さきには聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」(同書、p. 285)

##### ② 経文「如来所説」／苦の生起の聖諦を探求する

「また、比丘たちよ、まさにこの苦の生起の聖諦を知るべきであると、さきには聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」(同書、p. 285)

##### ③ 経文「如来所説」／苦の生起の聖諦を証明する

「また、比丘たちよ、すでにこの苦の生起の聖諦は、わたしによって証せられたのであると、さきにはいまだかつて聞かれなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」(同書、p. 285)

#### (2) 苦の生起(原因)の聖諦に関する三つのステップ

釈迦牟尼世尊は、人間の苦の生起(原因)に関する普遍的な真理を直観的に洞察しました。

釈迦牟尼世尊は、人間の苦の生起(原因)に関する普遍的な真理を、丹念に探求しました。

釈迦牟尼世尊は、人間の苦の生起(原因)に関する普遍的な真理を、洞察・探求を経て証明しました。

それは、釈迦牟尼世尊が、いままで誰からも聞いたことのないことでした。

#### (3) 経文「如来所説」／苦の生起の聖諦

「さて、ところで、比丘たちよ、苦の生起の聖諦はこうである。いわく、迷いの生涯を引き起し、喜びと貪りを伴い、あれへこれへと絡まりつく渴愛がそれである。すなわち、欲の渴愛・有の渴愛・無有の渴愛がそれである」(同書、p. 284)

#### (4) 「苦の生起」に関する普遍的な真理

人間は、自分の持つ渴愛によって、苦を招くのです。

これが、「苦の生起の聖諦」であり、釈迦牟尼世尊が、いままで誰からも聞いたことのないことでした。

#### (5) 人間は自分の苦の原因を知らない

苦悩する人びとは、自分の苦しみの原因が自分の持つ渴愛であるとは思っても寄らないのです。

自分の苦しみの原因は、自分以外のところからもたらされると、思い違いをすることが多いように見受けられます。

#### 4. 苦の滅尽の聖諦

##### (1) 経文「如来所説」

###### ① 経文「如来所説」／苦の滅尽の聖諦を洞察する

「かくて、比丘たちよ、苦の滅尽の聖諦はこれであると、さきにはいまだかつて聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」（同書、p. 285）

###### ② 経文「如来所説」／苦の滅尽の聖諦を探求する

「また、比丘たちよ、まさにこの苦の滅尽の聖諦を知るべきであると、さきにはいまだかつて聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」（同書、p. 285）

###### ③ 経文「如来所説」／苦の滅尽の聖諦を証明する

「また、比丘たちよ、すでにこの苦の滅尽の聖諦は、わたしによって証せられたのであると、さきにはいまだかつて聞かれなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」（同書、p. 285-286）

##### (2) 苦の生起の滅尽に関する三つのステップ

釈迦牟尼世尊は、人間の苦の滅尽に関する普遍的な真理を直観的に洞察しました。

釈迦牟尼世尊は、人間の苦の滅尽に関する普遍的な真理を、丹念に探求しました。

釈迦牟尼世尊は、人間の苦の滅尽に関する普遍的な真理を、洞察・探求を経て証明しました。

それは、釈迦牟尼世尊が、いままで誰からも聞いたことのないことでした。

##### (3) 経文「如来所説」／苦の滅尽の聖諦

「さて、ところで、比丘たちよ、苦の滅尽の聖諦はこうである。いわく、その渴愛をあますところなく離れ滅して、捨て去り、振り切り、解脱して、執着なきにいたるのである」（同書、p284）

##### (4) 苦の滅尽に関する普遍的な真理

苦の原因となっている渴愛を滅してしまえば、苦が滅尽するのです。

これが「苦の滅尽の聖諦」であり、釈迦牟尼世尊が、いままで誰からも聞いたことのないことでした。

##### (5) 人びとは自分の苦を滅する原理を知らない

苦悩する人びとは、自分の中にある渴愛を滅すれば苦が滅するとは、思いも寄らないのです。

苦は、自分の外側からくると思い込んでいますから、自分に苦をもたらす外側のものが無くなれば、苦は無くなると思ってしまう。

## 5 苦の滅尽にいたる道の聖諦

### (1) 経文「如来所説」

#### ① 経文「如来所説」／苦の滅尽にいたる道の聖諦を洞察する

「かくて、比丘たちよ、苦の滅尽にいたる道の聖諦はこれであると、さきにはいまだかつて聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」（同書、p. 286）

#### ② 経文「如来所説」／苦の滅尽にいたる道の聖諦を探求する

「また、比丘たちよ、まさにこの苦の滅尽にいたる道の聖諦を知るべきであると、さきにはいまだかつて聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」（同書、p. 286）

#### ③ 経文「如来所説」／苦の滅尽にいたる道の聖諦を証明する

「また、比丘たちよ、すでにこの苦の滅尽にいたる道の聖諦は、わたしによって証せられたのであると、さきにはいまだかつて聞かれなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである」（同書、p. 286）

### (2) 苦の滅尽にいたる道の聖諦に関する三つのステップ

釈迦牟尼世尊は、人間の苦の滅尽にいたる道に関する普遍的な真理を直観的に洞察しました。

釈迦牟尼世尊は、人間の苦の滅尽にいたる道に関する普遍的な真理を、丹念に探求しました。

釈迦牟尼世尊は、人間の苦の滅尽にいたる道に関する普遍的な真理を、洞察・探求を経て証明しました。

それは、釈迦牟尼世尊が、いままで誰からも聞いたことのないことでした。

### (3) 経文「如来所説」／苦の滅尽にいたる道の聖諦

「ところで、さて、比丘たちよ、苦の滅尽にいたる道の聖諦はこうである。いわく、聖なる八支の道である。すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である」（同書、p. 284）

### (4) 「苦の滅尽にいたる道」についての普遍的な真理

ここに「苦の滅尽にいたる道」は、「聖なる八支の道である」とあります。

これが、「苦の滅尽にいたる道の聖諦」釈迦牟尼世尊が、いままで誰からも聞いたことのないことでした。

### (5) 人間は苦を滅尽する道を知らない

多くの人びとは苦しみの原因は自分の外にあると考え、自分の外にある苦しみの原因を取り除こうとします。あるいは、自分の外にある苦しみの原因の作用を受けないことを考えます。

しかし、どんなことをしても、苦しみはなくなりません。なぜなら、苦しみは自分の内側から起きてくるからです。人びとは、苦を滅尽する道を知らないまま、苦しみの日々を送ってしまうのです。

## 6. 正覚の自覚

### (1) 経文「如来所説」

「比丘たちよ、わたしは、この四つの聖諦について、このような三転十二行をいとなみ、如実知見のことがすっかり明瞭となるまでは、比丘たちよ、わたしは、けっして、天神・悪魔・梵天をふくむかの世界、沙門・婆羅門・人天をふくむこの世界において、最高の正等覚を悟りえたと称しなかった。

しかるに、比丘たちよ、わたしは、この四つの聖諦について、このような三転十二行をいとなみ、如実知見のことがすっかり明瞭となったからして、比丘たちよ、わたしは、はじめて、天神・悪魔・梵天をふくむかの世界、沙門・婆羅門・人天をふくむこの世界において、最高の正等覚を悟りえたりと称したのである」(同書、p. 286)

### (2) 正覚への経緯

釈迦牟尼世尊は、四つの聖諦について徹底的に検証し、四つの聖諦が現実と完全に一致しているという見きわめがつくまでは、自分が正覚にいたったとは思わなかったのです。

洞察・探求・証明を繰り返して、四つの聖諦が現実と完全に一致しているという見きわめがついたので、自分は正覚を得たと確信したのです。

## 7. 釈迦牟尼世尊の確信

### (1) 経文「如来所説」

「また、わたしには、智慧と明察とが生じた。すなわち、〈わが心の解脱は不動である。これがわたしの最後の生であって、もはや、ふたたび迷いの生涯を繰返すことはないであろう〉と」

世尊はそのように説きたもうた。五人の比丘たちは、歓喜して、世尊の説きたまえるところを受領した」(同書、p. 286)

### (2) 釈迦牟尼世尊の確信

釈迦牟尼世尊は、ご自分が正覚を得たことを自覚し、ふたたび迷いの日々に戻ることはないことを確信しました。